

II 情報交換推進事業

情報交換推進事業

1 実施機関及び担当者

高知県水産試験場			
漁業資源部長	中	島	敏 男
総括主任研究員	森	山	貴 光
主任研究員	新	谷	淑 生
"	浦		吉 徳
"	明	神	寿 彦
研 究 員	梶		達 也
"	青	野	怜 史

2 対象海域及び漁業種類

高知県地先沿岸及び沖合域におけるイワシ・アジ・サバ・カツオ等を対象とする漁業

3 実施期間

平成 18 年 4 月 1 日～平成 19 年 3 月 3 1 日

4 情報収集

漁協、漁業指導所、漁業情報サービスセンター、漁業無線局（漁船、調査船）及びその他関係機関から電話、ファックス、郵便、現地調査により情報を収集した。

5 広報の方法

新聞、ファックス、郵便、電話により漁業者、漁協、漁業指導所、漁業情報サービスセンター及びその他関係機関に広報した。同時に高知県漁海況ホームページに掲載した。漁海況速報発行状況は表 1 に示した。

なお、平成 18 年下半期（8～12 月）の漁海況予報、平成 19 年上半期（1～6 月）の漁海況予報は資料 1,2 のとおり。

また主要魚種、主要漁業種類別漁獲統計、調査地は 主要魚種・主要漁業漁獲統計に示した。

表 1 漁海況速報発行状況

発行年月	回数	部数	備 考
18 年 4 月	4	8 1	8 月 平成 18 年下半期（8～12 月）漁海況予報 （資料 1）
5	5	8 1	
6	4	8 0	
7	4	7 9	
8	5	7 9	
9	4	7 9	
1 0	4	7 9	
1 1	5	7 9	
1 2	4	8 0	
19 年 1	4	8 0	
2	4	8 0	
3	4	8 0	
計	5 1	9 5 7	

(資料1)

高知県長期漁海況予報(要約版)

平成18年下期(8~12月)の漁況・海況の予想

平成18年8月発行 高知県水産試験場

このたび、平成18年8月から12月を予測期間とした「平成18年度第1回太平洋イワシ・アジ・サバ等長期漁況海況予報会議」が横浜市で開催されました。国、高知県及び関係都道府県の最新の調査結果から長期予報が作成されましたので、高知県関係を中心にその概要をお知らせします。

海況

【海況の経過(平成18年1月~6月)】

1. 黒潮

高知県沖の黒潮は、2月上旬まで接岸基調で推移しました。2月中旬から、小蛇行の東進に伴い足摺岬沖で「やや離岸」する傾向がみられました。3月から4月中旬にかけては、足摺岬沖で「著しく離岸」、室戸岬沖で「やや離岸」から「かなり離岸」となりました。4月下旬からは両岬沖で接岸傾向となり、6月下旬まで継続しました。6月下旬には再び足摺岬沖で離岸傾向となりました。

以上のように、高知県沖における今期の黒潮は春先と夏期に離岸傾向となり、それ以外は接岸基調で推移しました。

2. 沿岸水温

沿岸定線調査による土佐湾内の水温は、全般に平年並みから高めで推移しました。

月別にみると、1月は「平年並み」から「やや低め」、2月以降は「平年並み」から「やや高め」の水温が各層で観測されました。

3. 特異現象

海況

・定線観測などでは、特異現象とされるような事例は認められませんでした。

漁況

- ・県西部の釣りブリが不漁でした。
- ・1~2月、土佐湾におけるシラス漁が不漁でした(1~2月平年比33%)。
- ・1~3月、宿毛湾における中型まき網でマイワシが好漁でした(1~3月平年比159%)。
- ・4~5月、モジャコが不漁でした。
- ・4~6月、宿毛湾における中型まき網でウルメイワシが好漁でした(4~6月平年比276%)。
- ・5~6月、宿毛湾における中型まき網でキビナゴが好漁でした(5~6月平年比183%)。
- ・5~6月、宿毛湾における中型まき網でサバ類が好漁でした(5~6月平年比201%)。
- ・5~6月、土佐湾西部のシイラ漬まき網漁が不漁でした。

【今後の見通し(平成18年8~12月)】

1. 黒潮

流型：7月現在、N型(直進型)の黒潮は、9月までこのまま推移すると思われます。10月以降にA型(大蛇行)流路へ移行する可能性があります。

四国沖の黒潮：7月中旬現在、九州東方沖に存在する規模の大きい小蛇行が8~9月に四国

沖を通過する見込みです。

また、室戸岬沖では8月以降は離岸傾向になると予測されます。

(根拠)

人工衛星による日本南方海域の海面高度データを利用した小蛇行の形成・発達・東進の予測手法によっています。

2. 沿岸の水温

土佐湾 : 「平年並み」から「高め」で推移する見込み。

豊後水道東部海域 : 「平年並み」で推移する見込み。

紀伊水道外域西部海域 : 「平年並み」から「高め」で推移する見込み。

(根拠)

・高松地方気象台発表の「四国地方3か月予報」(6月22日発表、予報期間7~9月)によると、期間中の平均気温は「平年並み」か「高い」と予測されている。

・神戸海洋気象台発表の「平成18年夏季の南日本海区の海面水温予報」(5月31日発表、予報期間7~9月)によると、南日本海区の海面水温は全般的に「平年並」と予想されている。

・近年、土佐湾の表面水温は高め傾向で推移している。

漁 況

1 サバ類(ゴマサバ及びマサバ)

【漁況経過(平成18年4~6月)】

1 高知県

(1)宿毛湾の中型まき網による漁獲量は2,593トン(以下、漁獲量は期間中の合計を示します。)で、前年(1,727トン)および平年(1,647トン、以下、平年とは平成7年から平成16年の10年間の平均値を示します。)を上回りました。漁獲の主体はゴマサバで体長測定の結果、3月中旬から4月下旬には2歳魚が漁獲されましたが、6月上旬には1歳魚の混獲が認められ、下旬には1歳魚が大半を占めました。

(2)定置網(窪津・加領郷・椎名3水揚地合計)による漁獲量は151トンで、前年(183トン)を下回りましたが、平年(127トン)を上回りました。漁獲の主体はゴマサバで、東部海域で5月に行った体長測定の結果、1歳魚が大半を占めた前年と異なり、2歳魚が大半を占めました。一方、マサバは散発的な入網は認められるものの、漁獲量はサバ類全体の5%程度の低水準でした。

(3)釣(立縄・多鈎釣等、清水・加領郷・室戸・甲浦4水揚地合計)による漁獲量は329トンで、前年(260トン)を上回り、平年(341トン)並みでした。漁獲の大半はゴマサバで前年同様、3歳魚以上のものが大半を占めました。中部から東部海域の多鈎釣では2歳魚以下の漁獲割合が増加しました。また、マサバの漁獲量はサバ類全体の1%程度の低水準でした。

2 周辺各県の経過

宮崎県:まき網(北浦、島浦、青島の3港)による総漁獲量は3,704トンで、前年比127%、平年比446%(平成13年~平成17年の平均値)と、豊漁であった前年を上回り、2~4月及び6月の漁獲量は1,000トン以上の高い水準で推移しました。魚種はゴマサバで、サイズは資源水準が高いとされる2歳魚(尾叉長30~31cm)が主体となっていました。

愛媛県:豊後水道南部のまき網の漁況は、近年並の高水準で推移しました。

和歌山県:紀伊水道外域の2そうまき網による漁獲量は6,941トンで前年及び平年を下回りました。漁獲の主体はゴマサバで、中、小型魚が多く、4月の漁獲の主体は2歳魚(平成16年生まれ)でした。熊野灘南部定置網の漁獲量は24トンで前年比20%、平年比24%と低調な漁獲で推移しましたが、南部町1そうまき網はゴマサバ主体で前年比503%、平年比821%の好調な漁獲

で推移しました。

【漁況予測（平成 18 年 8～12 月）】

(1) 漁獲対象：1 歳魚(平成 17 年生まれ)及び 2 歳魚(平成 16 年生まれ)が主体となるでしょう。

(2) 来遊水準：

- ・ ゴマサバ：1 歳魚(平成 17 年生まれ)は前年を下回るでしょう。2 歳魚(平成 16 年生まれ)は前年を上回るでしょう。3 歳魚(平成 15 年生まれ)を含めた全体としては、前年を下回るものと考えられます。
- ・ マサバ：1 歳魚(平成 17 年生まれ)、2 歳魚(平成 16 年生まれ)とも前年を上回るものの、依然低水準で推移すると考えられます。

説明：

ゴマサバ：2 歳魚が平成 16 年に 0 歳魚として来遊してきた時の尾数は、近年では平成 8 年(17 億尾)と同程度に多かったものと推定されています。2 歳魚となった今期(8 月～12 月)も残存尾数は多いものと考えられており、高水準の来遊が期待されます。

一方、1 歳魚が、平成 17 年に 0 歳魚として来遊してきた時の尾数は、16 年生まれを大幅に下回る、6 億尾と推定されており、今期の来遊は多くを期待出来ないものと考えられます。また、平成 18 年生まれの 0 歳魚の来遊は、17 年生まれをさらに下回るとの情報が各地からもたらされています。

マサバ：マサバ太平洋系群の資源水準は依然として低位であるものの、動向は増加の傾向にあると考えられています。しかしながら、昨年同様、伊豆諸島周辺海域以西では、来遊するサバ類のうちマサバの割合は低く、高知県海域も同様の傾向です。平成 18 年春季に沿岸に来遊したマサバの幼魚の割合は前年に比べ大幅に増加していますが、尾数はゴマサバに比べると依然、極めて少ない状況であることから、来遊はあまり期待できず、漁獲があっても散発的なものと考えられます。

II マアジ

【漁況経過（平成 18 年 4～6 月）】

1 高知県

(1) 宿毛湾の中型まき網による漁獲量は 417 トンで、前年(304 トン)を上回り、平年(422 トン)並みでした。銘柄別では、150g 以上の「アジ」が 170 トンで、前年(87 トン)および平年(102 トン)を上回りました。150g 未満の「ゼンゴ」は 247 トンで、前年(216 トン)並みでしたが、平年(320 トン)を下回りました。漁獲物の体長測定結果等によると、1 歳魚を主体に漁獲されていたと思われます。

(2) 定置網(窪津・加領郷・椎名 3 水揚地合計)による漁獲量は 300 トンで、前年(216 トン)および平年(245 トン)を上回りました。

2 周辺各県の経過

宮崎県：まき網(北浦、島浦、青島の 3 港)による平成 18 年 1～6 月の総漁獲量は 779 トンで、前年比 46%、平年比 50%(平成 13 年～平成 17 年の平均値)でした。

愛媛県：豊後水道では中部海域主体に漁場が形成され、総漁獲量は 2,038 トンで前年比 114%、近年比 102%(平成 13 年～平成 17 年の平均値)でした。

和歌山県：紀伊水道外域 2 そうまき網(比井崎、御坊市、田辺計)による平成 18 年 4～6 月の漁獲量は 87.2 トンで、前年比 18%、平年比 12%(平成元年～平成 17 年の平均値)と低調でした。

【漁況予測（平成 18 年 8～12 月）】

来遊量：

(1) 漁獲対象：0 才魚(平成 18 年生まれ)、1 才魚(平成 17 年生まれ)主体。

(2)来遊水準：

- ・宿毛湾周辺、土佐湾以東ともに前年並みの見込みです。

説明：

マアジの資源量は中水準で、現在は減少傾向にあります。

今季の主体となるマアジのうち、1才魚は、高知県を含む南日本各地で前年をやや上回る水準で推移しています。しかし、0才魚の加入は南日本の各地で非常に低い傾向にあります。2才魚以上は少ないでしょう。全体では前年並みとなる見込みです。

III マイワシ

【漁況経過（平成18年4～6月）】

1 高知県

(1)宿毛湾の中型まき網による漁獲量は96トンで、前年(68トン)を上回り、平年(100トン)並みでした。

(2)定置網(窪津・加領郷・椎名3水揚地合計)による漁獲量は21トンで、前年(71トン)および平年(62トン)を下回りました。

魚体測定結果から、定置網では0才魚(平成18年生まれ)が、まき網では1才魚(平成17年生まれ)が主体に漁獲されました。

2 周辺各県の経過

宮崎県：4～6月のまき網による総漁獲量は約102トンで、4、5月は低調に推移し、6月下旬に小イワシの漁獲がみられました。県南海域の大型定置網でも6月から小イワシの入網が見られるようになりました。

愛媛県：豊後水道南部海域のまき網が水揚げ量の99%を占め、4月水揚げなし、5月4トン、6月24トンの計28トンでした。水揚げ量は前年比13%、近年比14%、平年比1%の極めて低水準で推移しており、散発的な水揚げにとどまりました。

和歌山県：串本・南部町漁協の1そうまき網では、前年を上回り、平年を下回りました(前年比110%、平年比39%)。熊野灘定置網ではほとんど漁獲がありませんでした(前年比237%、平年比7%)。0才魚を漁獲対象とする南部町漁協(紀伊水道外域東部)の棒受網では、期間を通して不漁であり、前年および平年を下回りました(前年比26%、平年比26%)。

【漁況予測（平成18年8～12月）】

(1)漁獲対象：0才魚(平成18年生まれ)、1才魚(平成17年生まれ)主体。

(2)来遊水準：高知県海域(宿毛湾、土佐湾、紀伊水道外域西部)では前年を下回ると考えられます。

説明：

(定置網)近年の魚体測定結果から考えますと、本県定置網では4、5月から7～12cmの0歳魚が主体に漁獲され始め、下半期(7～12月)も0歳魚主体の漁となることが予想されます。このことから、4、5月の定置網マイワシ漁獲量合計と同年下半期における定置網マイワシ漁獲量の関係を見ると、4、5月の定置網マイワシ漁獲量が多いと下半期の定置網マイワシ漁獲量も多いという関係がみられました。平成18年は4、5月の定置網マイワシ漁獲量が低調であったことから、下半期は低調に推移すると思われます。

また、中央水産研究所がまとめた平成18年産卵期(平成17年10月～平成18年6月までの暫定値)のマイワシ産卵量は約35兆粒で、近年で最低の平成14年並みの結果でした。

高知県では、1～3月に漁獲されるシラスは主にマイワシシラスですが、平成18年1～3月のシラス漁は低調に推移しました。ただし、黒潮が高知沖を接岸基調で推移したという、海況による影響もあったと考えられます。

以上のことや、近年の漁況経過などから勘案しますと、下半期は低調で、前年を下回ると予想されます。

(まき網)近年の魚体測定結果から考えますと、下半期は定置網同様に0歳魚が主体に漁獲されることが予想されます。上記(定置網)で説明したように、0歳魚は低水準であることが予想されるため、下半期は定置網同様に低調に推移することが予想されます。

また、1~3月のシラス漁獲量と下半期のまき網漁獲量の関係を見ると、1~3月のシラス漁獲量が多いと下半期のまき網漁獲量も多いという関係がみられました。1~3月のシラス漁獲量は低調であったことから、下半期は低調に推移することが予想されます。

以上のことや、近年の漁況経過などから勘案しますと、下半期は前年を下回ると思われます。

IV カタクチイワシ

【漁況経過(平成18年4~6月)】

1 高知県

(1)宿毛湾の中型まき網による漁獲は327トンで、前年(737トン)を下回り、平年(325トン)並みでした。銘柄別では幼魚「ドロ」は68トンで、前年(425トン)および平年(85トン)を下回りました。未成魚・成魚の銘柄「タレ」は259トンで、前年(312トン)を下回りましたが、平年(241トン)並みでした。

(2)定置網(窪津・加領郷・椎名3水揚地合計)による漁獲量は90トンで、前年(112トン)を下回りましたが、平年(52トン)を上回りました。

2 周辺各県の経過

宮崎県:4月から6月のまき網による総漁獲量は585トンで、前年同期比92%、平年比13%と前年、平年を下回りました。

愛媛県:豊後水道南部海域のまき網が水揚げ量の68%を占め、計1,274トンの水揚げ量で、前年比331%、近年比117%、平年比204%の高水準で推移しました。

和歌山県:漁獲対象魚種ではなく、熊野灘定置網でもほとんど漁獲がありませんでした。

【漁況予測(平成18年8~12月)】

(1)漁獲対象:0才魚(平成18年生まれ)、1才魚(平成17年生まれ)。

(2)来遊水準:前年を下回ると思われます。

説明:

近年における本県の漁況経過などから勘案しますと、宿毛湾では好漁の前年を下回ると思われます。土佐湾および紀伊水道外域西部では、例年どおり8月以降の漁獲はほとんどないと思われます。

V ウルメイワシ

【漁況経過(平成18年4月~6月)】

1 高知県

(1)宿毛湾の中型まき網による漁獲量は1221トンで、前年(607トン)及び平年(442トン)を大きく上回り、1983年以降で最も多い漁獲量となりました。

(2)定置網(窪津・加領郷・椎名3水揚地合計)による漁獲量は27トンで、前年(84トン)を下回り、平年(21トン)並みでありました。

(3)宇佐漁協の多鈎釣漁による漁獲量は6トンで、前年(1トン)を上回り、平年(19トン)を下回りました。

魚体測定結果から、定置網では0才魚(平成18年生まれ)が、まき網では1才魚(平成17年生まれ)が主体に漁獲されました。

2 周辺各県の経過

宮崎県：1～6月のまき網による総漁獲量は2,285トンで、前年同期比135%、平年比128%と前年・平年を上回りました。1～3月の漁獲は高位で推移し、4～5月は減少し、6月には再び増加しており、昨年および平年と同じような変動をしました。

愛媛県：南部海域のまき網水揚げ量が全体の95%を占め、1～3月は平年および近年を大きく上回る水揚げ(計630トン)が継続しました。4月は顕著な不漁となり、5月以降は回復の兆しがみられました。上半期の水揚げ量は計915トンで、前年比87%、近年比112%、平年比151%の高水準で推移しました。

和歌山県：串本・南部町漁協の1そうまき網では、平成17年8月以降の好調を持続し、前年および平年を大きく上回りました。熊野灘定置網では1～2月にまとまった漁獲があり、前年および平年を大きく上回りました。0歳魚を漁獲対象とする南部町漁協(紀伊水道外域東部)の棒受網では、前年および平年を下回りました。また、串本漁協(潮岬周辺)の棒受網でも、前年および平年を下回りました。

【漁況予測(平成18年8～12月)】

(1)漁獲対象：0才魚(平成18年生まれ)、1才魚(平成17年生まれ)主体。

(2)来遊水準：宿毛湾は高水準の前年並か前年を下回ると考えられます。1歳魚は高水準。土佐湾および紀伊水道外域西部は前年を下回ると考えられます。

説明：

(宿毛湾)本県定置網では、3～6月に8～10cmの0歳魚が主体で漁獲されます。宿毛湾のまき網では、近年の魚体測定結果から、下半期は0および1歳魚が主体で漁獲されることが予想されます。このことから、3～6月の定置網ウルメ漁獲量合計と下半期まき網ウルメ漁獲量の関係を見ると、3～6月の定置網ウルメ漁獲量が好漁だと下半期のまき網ウルメ漁獲量も好漁という関係がみられました。平成18年3～6月の定置網漁獲量は低調であったことから、下半期まき網漁獲量は好漁の前年を下回ると考えられます。ただし、平成17年下半期は0歳魚主体に高水準の来遊がみられ、平成18年4～6月の近年にない好漁も、この影響が大きかったと考えられます。下半期にも1歳魚として漁獲されることが予想されます。

(土佐湾・紀伊水道外域西部)0歳魚が主体に漁獲される3～6月の定置網漁獲量が低調に推移したことや、本県における近年の漁況経過などから勘案しますと、下半期は好漁の前年を下回ると考えられます。

VI シラス

【漁況経過(平成18年4～6月)】

1 高知県

機船船曳網(安芸地区4水揚地・春野町・錦浦・田野浦7水揚地合計)による漁獲量は287トンで、好漁の前年(366トン)を下回り、平年(171トン)を上回りました。

2 周辺各県の経過

宮崎県：4～5月の総漁獲量は1,349トンで前年同期比62%、平年比では108%と豊漁であった前年を下回りました。3月から漁が始まり、4月を頂点に5、6月は低位に水準するという漁況は前年・平年どおりでありました。

愛媛県：吉田町漁協における共販取扱量は、9トンと前年比25%、近年比46%、平年比17%の低水準で推移しています。

和歌山県：紀伊水道外域東部では、前年および平年を上回りました(前年比119%、平年比147%)。

【漁況予測(平成18年8～12月)】

(1)漁獲対象：0才魚(平成18年生まれ)。

(2)来遊水準：前年並みから上回る。

説明：

近年における本県の漁況経過および親魚の来遊水準などから勘案しますと、下半期は前年並で推移することが予想されます。平成17年12月は黒潮が高知沖を接岸基調で推移したなどの原因で、近年では低調な漁模様でありました。しかし、平成18年下半期は、黒潮が蛇行型流路をとることが予想されるため、12月漁の好転によっては前年を上回ると考えられます。

(資料2)

高知県長期漁海況予報(要約版)

平成19年上半期(1~6月)の漁況・海況の予想

平成19年1月発行 高知県水産試験場

このたび、平成19年1月から6月を予測期間とした「平成18年度第2回太平洋イワシ・アジ・サバ等長期漁況海況予報会議」が横浜市で開催されました。国、高知県及び関係都道県等の最新の調査結果から長期予報が作成されましたので、高知県関係を中心にその概要をお知らせします。

海況

【海況の経過(平成18年8月~12月)】

1. 黒潮

高知県沖の黒潮は、8月は足摺岬沖で「かなり離岸」の後「接岸」、室戸岬南沖で「やや離岸」の後「接岸」となりました。9月は両岬沖でおおむね「接岸」の後「やや離岸」で推移しました。10月は両岬沖で「やや離岸」の後「接岸」となりました。11月は足摺岬沖で「接岸」の後「やや離岸」、室戸岬沖は「やや離岸」で推移しました。12月は両岬沖とも「やや離岸」の後「接岸」で推移しています。

以上のように、高知県沖における今期の黒潮は小規模な変動を示しつつ接岸~やや離岸で推移しました。

2. 沿岸水温

全般に「やや高め」から「著しく高め」で推移しました。月別にみると、8月は全層で「やや高め」でした。9月以降は、11月、12月の200mで「かなり低め」であった他は、「やや高め」から「著しく高め」で推移しました。

3. 特異現象

海況

- ・沿岸定線観測で、10月の50、100mは過去3番目の高水温となりました(1975年以降、欠測年有り)。
- ・沿岸定線観測で、11月の0、50、100mは過去最高水温、200mは過去2番目の低水温を記録しました(1975年以降)。

漁況

- ・10、11月、宿毛湾における中型まき網でマイワシが好漁でした。10月は平年比1033%、11月は平年比583%に達しました。
- ・10月以降、県西部の定置網でブリ当才魚(ヤズ)が不漁でした。
- ・11月、土佐湾中央部の多鈎釣でウルメイワシが不漁でした(11月平年比2%)。
- ・11月、県西部の曳き縄でマルソウダが不漁でした(11月平年比26%)。

【今後の見通し(平成19年1~6月)】

2. 黒潮

流型：12月現在、N型(直進型)の黒潮は、2月に一時的にB型傾向、3月から4月にC型傾向、5月から6月にD型傾向の流路パターンになる見込みです。

四国沖の黒潮：12月中旬現在、九州東方沖に存在する規模の大きい小蛇行が12月から1月に四国沖を東進する見込みです。

室戸岬沖から潮岬沖では1月から2月に離岸傾向が強まると予想されます。

（根拠）

人工衛星による日本南方海域の海面高度データを利用した小蛇行の形成・発達・東進の予測手法によっています。

2．沿岸の水温

「平年並み」から「高め」で推移する見込みです。

（根拠）

- ・高松地方気象台発表の「四国地方3か月予報」（11月22日発表、予報期間12～2月）によると、期間中の平均気温は「高い」か「平年並み」となっています。
- ・近年、土佐湾の表面水温は高め傾向で推移しています。

漁 況

1 サバ類（ゴマサバ及びマサバ）

【漁況経過（平成18年7月～11月）】

1 高知県

- (1)宿毛湾の中型まき網による漁獲量は1227.3トン（以下、漁獲量は期間中の合計を示します）で、前年（1969.7トン）を下回り、平年（1054.4トン 以下、平年とは平成7年から平成16年の10年間の平均値を示します）を上回りました。

まき網漁獲物の体長測定結果によると、魚種としてはゴマサバが主体でした。7月中旬には2才魚（平成16年生まれ）が漁獲の主体でしたが、7月下旬には1才魚（平成17年生まれ）も混獲され、8月以降は1才魚が主体を占めていました。

- (2)定置網（窪津・加領郷・椎名3水揚地合計）による漁獲量は143.6トンで、前年（213.0トン）平年（203.1トン）を下回りました。

漁獲物の体長測定並びに県東部室戸地区の2漁場（椎名、高岡）の定置網入網調査等の結果によると、主体はゴマサバでした。西部海域（足摺岬周辺海域）では7月中旬までは2才魚（平成16年生まれ）が漁獲されましたが、下旬には1才魚（平成17年生まれ）が漁獲されました。東部（室戸岬周辺海域）では、0才魚（平成18年生まれ）や1才魚（平成17年生まれ）は漁獲されず、2才魚（平成16年生まれ）以上が漁獲されました。マサバは依然として散発的に漁獲される程度で、混獲率は2.0%以下の低水準でした。

- (3)釣（立縄・多鈎釣等、清水・加領郷・室戸・甲浦4水揚地合計）による漁獲量は529トンで、前年（678トン）、平年（676トン）を下回りました。

魚種はゴマサバで、西部海域の立縄漁法による漁獲の主体は、例年同様3才魚（平成15年生まれ）以上が占めていましたが、10月以降には2才魚（平成16年生まれ）の漁獲が認められました。中、東部海域では、期間中3才魚以上の大型魚は少なく、2才魚の占める割合が前年並びに平年の割合を上回りました。

2 周辺各県の経過

宮崎県：まき網（北浦、島浦、青島の3港）による7～11月の総漁獲量はゴマサバ主体に4,194トンで、前年比42%、平年比131%（平成13年～平成17年の平均値）でした。

愛媛県：豊後水道では南部を中心に漁場が形成され、総漁獲量は1,224トンで前年比35%、平年比61%（昭和61年から平成17年の平均値）でした。

和歌山県：紀伊水道外域の2そうまき網による7～11月の総漁獲量はゴマサバ主体に1,799トンで、前年比109%、平年比59%（平成元年～平成17年の平均値）でした。熊野灘南部定置網の7～11月の総漁獲量はゴマサバ主体に34トンで、前年比46%、平年比61%（平成5年～平成17年の平均値）でした。

【漁況予測（平成19年1～6月）】

- (1) 漁獲対象：3才魚（平成16年生まれ）、2才魚（平成17年生まれ）。期の後半に1才魚（平成18年生まれ）。
- (2) 来遊水準：
 - ・ゴマサバ：本県への来遊は3才魚は前年を上回るものの、全体としては前年を下回るものと予想されます。
 - ・マサバ：来遊は依然、低水準と予想されます。

説明：

ゴマサバ：資源水準の高い3才魚（平成16年生まれ）の残存資源量は依然、多いと推定されていますが、2才魚（平成17年生まれ）および1才魚（平成18年生まれ）の資源水準は、3才魚に比べ大幅に低いと推定されており、本県への来遊は全体としては少ないものと考えられます。

マサバ：ゴマサバ同様、2才魚、1才魚とも資源水準は低いと推定されており、来遊は依然、低水準と予想されます。

II マアジ

【漁況経過（平成18年7月～11月）】

1 高知県

- (1) 宿毛湾の中型まき網による漁獲量は534.2トンで、前年（535.8トン）並みで平年（846.8トン）を下回りました。銘柄別では、150g以上の「アジ」が310.3トンで、前年（228.1トン）および平年（259.9トン）を上回りました。150g未満の銘柄「ゼンゴ」は223.9トンで、前年（307.7トン）および平年（586.9トン）を下回りました。漁獲物の体長測定結果等によると、7～8月は尾叉長18～22cmの1才魚（平成17年生まれ）以上が主体であり、9月以降は尾叉長14cm台の0才魚（平成18年生まれ）も漁獲されたと考えられます。
- (2) 定置網（窪津・加領郷・椎名3水揚地合計）による漁獲量は47.1トンで、前年（74.8トン）および平年（145.1トン）を下回りました。定置網入網調査と魚体測定結果から、7月は尾叉長18cm台の1才魚主体、8月以降はFL12～14cm台の0才魚主体であったと考えられます。

2 周辺各県の経過

宮崎県：まき網（北浦、島浦、青島の3港）による7～11月の総漁獲量は867トンで、前年比40%、平年比26%（平成13年～平成17年の平均値）でした。

愛媛県：豊後水道では中部海域を主体に漁場が形成され、総漁獲量は1,839トンで、前年比48%、平年比78%（昭和61年～平成17年の平均値）でした。

和歌山県：紀伊水道外域2そうまき網による漁獲量は、1,498トンで、前年比182%、平年比121%（平成元年～平成17年の平均値）でした。

【漁況予測（平成19年1～6月）】

- (1) 漁獲対象：0才魚（平成19年生まれ）、1才魚（平成18年生まれ）主体。
- (2) 来遊水準：
 - ・宿毛湾周辺海域、土佐湾以東ともに前年並みから前年を下回ると考えられます。

説明：

宿毛湾周辺海域では、平成18年下半期のゼンゴが低調であったことから、主体となる1才魚（平成18年生まれ）の水準は低いと推定され、前年並から前年を下回る来遊量と考えられます。

土佐湾以東の海域では0才魚（平成19年生まれ）、1才魚（平成18年生まれ）主体に来遊しません。0才魚（平成19年生まれ）は期の後半に来遊すると考えられますが、水準は不明です。1才魚（平成18年生まれ）の来遊水準は低いと考えられることから、当海域への来遊は前年を下回る

と推定されます。全体では前年並から前年を下回ると考えられます。

III マイワシ

【漁況経過（平成 18 年 7 月～11 月）】

1 高知県

- (1) 宿毛湾の中型まき網による漁獲量は 703.2 トンで、前年（161.0 トン）および平年（230.5 トン）を大きく上回りました。特に 10 月には、上旬を中心として 7 日間で 546 トンもの漁獲がみられました。魚体測定結果から、10、11 月は尾叉長 18cm 前後の 1 才魚（平成 17 年生まれ）主体に、15cm 前後の 0 才魚（平成 18 年生まれ）も混獲されたと考えられます。
- (2) 定置網（窪津・加領郷・椎名 3 水揚地合計）による漁獲量は 12.3 トンで、前年（42.9 トン）および平年（51.7 トン）を下回りました。魚体測定結果から、0 才魚（平成 18 年生まれ）主体に漁獲されたと考えられます。

2 周辺各県の経過

宮崎県：まき網（北浦、島浦、青島の 3 港）の 7 月から 11 月における総漁獲量は 1,463 トンで、前年比 543%、平年比 948%（平成 13 年～平成 17 年の平均値）でした。

愛媛県：豊後水道では南部海域を中心に漁場が形成され、総漁獲量は 69 トンで、前年比 17%、平年比 9%（昭和 61 年～平成 17 年の平均値）でした。

和歌山県：串本・南部町漁協の 1 そうまき網による 7 月から 11 月の総漁獲量は 234 トンで、前年比 39%、平年比 82%（平成 6 年～平成 17 年までの平均値）でした。

【漁況予測（平成 19 年 1～6 月）】

(1) 漁獲対象：0 才魚（平成 19 年生まれ） 1 才魚（平成 18 年生まれ）主体。

(2) 来遊水準：宿毛湾では、好漁の前年並みか上回ると考えられます。

土佐湾以東の海域では、低調であった前年を上回ると考えられます。

説明：マイワシ太平洋系群の資源量は依然低水準で推移しています。しかし、平成 18 年下半期には宿毛湾で近年にない好漁となり、宮崎県と三重県でも散発的ながら近年にない好漁がみられました。平成 19 年上半期は、引き続いて好漁となることが予想されます。

IV カタクチイワシ

【漁況経過（平成 18 年 7 月～11 月）】

1 高知県

- (1) 宿毛湾の中型まき網による漁獲量は 76.6 トンで、前年（688.5 トン）および平年（164.5 トン）を大きく下回りました。銘柄別では幼魚「ドロ」が 38.7 トンで、前年（283.2 トン）を大きく下回り、平年（38.5 トン）並みでした。未成魚・成魚の銘柄「タレ」は 37.9 トンで、前年（405.3 トン）および平年（126.0 トン）を大きく下回りました。
- (2) 定置網（窪津・加領郷・椎名 3 水揚地合計）による漁獲は 10.3 トンで、前年（7.2 トン）および平年（8.1 トン）を上回りました。

2 周辺各県の経過

宮崎県：まき網（北浦、島浦、青島の 3 港）による 7～11 月の総漁獲量は 1,227 トンで、前年比 130%、平年比 78%（平成 13 年～平成 17 年の平均値）でした。

愛媛県：豊後水道では中部海域を中心に漁場が形成され、総漁獲量は 1,087 トンで前年比 34%、平年比 53%（昭和 61 年～平成 17 年の平均値）でした。

和歌山県：成魚は主な漁獲対象種ではないため、漁獲動向から漁況を判断できません。

V ウルメイワシ

【漁況経過（平成 18 年 7 月～11 月）】

1 高知県

- (1) 宿毛湾の中型まき網による漁獲量は 1021.1 トンで、好漁の前年（1570.3 トン）を下回りましたが、平年（492.5 トン）を大きく上回りました。前年同様、7 月と 10 月が好漁となりました。魚体測定結果から、7 月は体長 20cm 前後の 1 才魚（平成 17 年生まれ）主体に 414.1 トン、10 月は体長 15～17cm の 0 才魚（平成 18 年生まれ）主体に 341.0 トン漁獲されたと考えられます。
- (2) 定置網（窪津・加領郷・椎名 3 水揚地合計）による漁獲量は 44.5 トンで、前年（138.4 トン）および平年（77.7 トン）を下回りました。魚体測定結果から、県下定置網では 0 才魚（平成 18 年生まれ）が主体に漁獲されたと考えられます。
- (3) 宇佐漁協の多鈎釣漁（土佐湾中央部）による漁獲量は 5.1 トンで、前年（36.1 トン）および平年（17.2 トン）を下回りました。

2 周辺各県の経過

宮崎県：まき網（北浦、島浦、青島の 3 港）による 7～11 月の総漁獲量は 5,301 トンで、前年同期比 134%、平年比 166%（平成 13 年～平成 17 年の平均値）でした。

愛媛県：豊後水道は南部を中心に漁場が形成され、総漁獲量は 1,027 トンで、前年比 41%、平年比 166%（昭和 61 年～平成 17 年の平均値）でした。

和歌山県：串本・南部町漁協の 1 そうまき網では、総漁獲量が 173 トンで前年比 39%、平年比 116%（平成 6 年から平成 17 年の平均値）でした。

【漁況予測（平成 19 年 1～6 月）】

(1) 漁獲対象：0 才魚（平成 19 年生まれ） 1 才魚（平成 18 年生まれ）

(2) 来遊水準：

宿毛湾では、近年における本県の漁況経過および魚体測定結果から勘案すると、平成 19 年上期は 1 才魚（平成 18 年生まれ）主体に高水準の来遊が期待できます。しかし、昭和 58 年以降で最も高水準であった前年は下回ると考えられます。

土佐湾以東の海域では、1 才魚（平成 18 年生まれ）主体に、4 月以降は 0 才魚（平成 19 年生まれ）も漁獲の主体となると考えられます。

説明：

宿毛湾

1) 平成 18 年下半期は、10 月に 15～17cm の 0 才魚（平成 18 年生まれ）が主体に 300 トンを超える漁がみられました。平成 19 年上半期は、これら 0 才魚（平成 18 年生まれ）が 20cm 前後の 1 才魚となって漁獲されることが予想されます。平成 19 年上半期は 1 才魚（平成 18 年生まれ）主体に高水準の来遊が期待されます。

1) 過去の漁獲量データによると、宿毛湾におけるウルメイワシ上半期漁獲量は前年下半期漁獲量と関係がみられます（前年下半期の漁獲量が多いと、上半期の漁獲量も多い）。平成 18 年下半期漁獲量は 1,000 トンを超える好漁であったことから、平成 19 年上半期は好漁が期待されます。

土佐湾以東の海域

1) 1 才魚（平成 18 年生まれ）の資源水準は高いことから、低調であった前年を上回る来遊が期待されます。

VI シラス

【漁況経過（平成 18 年 7 月～11 月）】

1 高知県

機船船曳網（安芸地区・春野町・錦浦・田野浦 7 水揚地合計）による漁獲量は 131.9 トンで、前年（134.0 トン）及び平年（139.9 トン）並でした。

2 周辺各県の経過

宮崎県：7～10 月の総漁獲量（県内 8 漁協）は 1,433 トンで、前年比 74%、平年比（平成 13 年～

平成 17 年の平均値) 110%でした。

大分県：佐伯湾における 7~11 月の漁獲量は 85.9 トンで、前年比 113%、平年比(平成 3 年~平成 16 年の平均値) 51%でした。

徳島県：紀伊水道内における 7~11 月の漁獲量は 608 トンで、前年並みで平年(平成 2 年~平成 17 年の平均値)を下回りました。

【漁況予測(平成 19 年 1~6 月)】

(1)漁獲対象：0 才魚(平成 19 年生まれ)

(2)来遊水準：親魚の来遊水準および平成 19 年上半期における海況予想から考えると、低調であった前年を上回ると考えられます。

説明：

親魚の来遊水準から(現時点では産卵量は不明)

平成 18 年下半期におけるウルメイワシ親魚の資源量および来遊量は高水準で、平成 19 年上半期も高水準で推移することが予想されます。マイワシ親魚においては、資源量は依然低水準で推移しているものの、平成 18 年下半期は宿毛湾をはじめとする西日本で好漁がみられ、平成 19 年上半期も前年並の好漁が予想されます。

海況

平成 18 年上半期(特に 1 月から 3 月)の不漁は、黒潮が四国沖を接岸基調で推移したことが原因の一つと考えられます。しかし、平成 19 年上半期は四国沖を小蛇行が東進し、1 月から 2 月には室戸岬で離岸傾向が強まることが予想されます。このことから、平成 19 年上半期におけるシラス漁況にとっての海況条件は、18 年上半期より良いと考えられます。